歴史の行間

有田の名宝展こぼれ話

「有田の名宝展」九陶吉永学芸課長による展示品の説明

このほど平成８年に開催された世界焱の博覧会５周年記念と、有田ミュージアムズ連絡会の発足を記念して、九州陶磁文化館において「有田の名宝展」が開催されました。各ミュージアムズからの出品と各家庭で所蔵されていた名品が一堂に会し、見応え十分の企画展となりました。３ヶ月の期間中、19,000名以上の入場者を迎え、好評の内に終了することができました。

企画展の資料所在調査も終えた頃、大変珍しい資料が見つかりました。それは明治時代のパスポートと焼き物でした。所有者は泉山の江原佳代子さんで、当時泉山区長を務められていた石丸雅章さんを介して当館に届けられました。パスポートは江原房五郎さん名義で、明治33年４月25日付けです。

江原房五郎さんは当時37歳でした。パスポートには次のように記されています。

「右は出稼ぎの為め露領浦塩斯徳へ赴くに付通路故障なく旅行せしめ且必要の保護扶助を与えられん事其筋の諸官に希望す　日本帝国外務大臣従二位一等子爵青木周蔵」

早速、『肥前陶磁史考』をひも解いてみますと、このことに関する記事がありました。そこにはロシア・ガンゴーザという所で、ロシアのニコライ皇帝の支族であったグレゴリーウオッチ・ペルミキンという人物が製陶を始めるにあたって、長崎にいた北島栄助（似水・赤絵町出身）の斡旋で有田から職人などを雇い入れたこと。このときの窯方と細工人には泉山の江上（江原の間違いか）房五郎・橋口三次郎、岩谷川内の中島政助、画工に大樽の牛島定七、窯積み方に泉山の諸岡国太郎、事務員として赤絵町の今泉茂右衛門等が明治35年に渡航したとあります。

江原佳代子さん寄贈

ロシアでの開窯にあたって、原料は泉山と天草の陶石を購入し、その他一切の材料はすべて有田から取り寄せたそうです。できた製品はクルシカという厚手の取っ手付きコップ、肉皿、砂糖入れ、便器などでした。今回寄贈いただいたものの中には取っ手付きコップのほかに、色絵が施された蓋付きの入れ物もありました。

工場の拡張計画が進む中、次第に日露の国交間が険悪となり、同36年11月には有田に引き上げました。そして翌37年２月８日、佐世保港を出港した連合艦隊は中国・旅順港外のロシア艦隊を襲撃して、日露戦争が始まったのでした。

今回寄贈いただいた資料は４点ですが、明治期に行われた有田の海外進出を物語る貴重なものです。「有田の名宝展」には間に合いませんでしたが、当館に於いて紹介しますのでぜひ、ご観覧ください。　（尾崎）

めも

ロシアでの開窯については「肥前陶磁史考」に詳しくありますが、「有田町史」にはこの件に関する記載はありません。ただ、江上房五郎という窯焼きの名はたびたび登場しますが、パスポートに記載された氏名と子孫の方から類推する限り、江原房五郎と江上房五郎は別人であると思います。

季刊
皿山　冬　No.52
有田町歴史民俗資料館・館報

昭和６年４月に独立青年訓練所・有田公民学校として創立された有田町高等実業青年学校は、同22年、学校教育法の公布まで存続し、多くの生徒を輩出した。焼物実習のための教室が完備され、これはその中のろくろ室。約60台のろくろが据えられていた。〈幸平・北川美則さん提供〉

大正ごろのおくんちに参加した白川区の人々。後列左から３人めは佐賀県議会議員などを務めた深川六助さん。前から２列め、左端は粟島町に住んでいた浄瑠璃の師匠・梅若さん。〈神戸市・星野房代さん提供〉

昭和18年、白川評定場での町民運動会。現在は有田ダムの湖底となっている。背後に黒髪山の天童岩が見える。〈幸平・北川美則さん提供〉

白川の釉石運搬風景。右は武雄市武内町在住だった松尾国雄さん。左はその弟の勝馬さん。昭和33年11月に撮影されたもの。〈和歌山県・松尾勝見さん提供〉

●大正のころ

大正5年に陶祖李参平の創業３００年祭が行われました。それを記念して陶山神社の背後に記念碑の建設や、品評会に付随する陶器市の開催と、深川六助ら当時の若者が町おこしの事業を活発に行いました。この時代は「大正デモクラシー」の時代でもあり、『民本主義』の思想のもとに職工によるストライキや、業者間の紛争も相次ぎました。

●昭和のころ

昭和３年４月、有田町は国道拡張工事に着工。４年の歳月をかけて巾5間、長さ1里以上の県下唯一の美しい道路と評された国道33号線（当時）が開通しました。同5年、中樽に佐賀県第一窯業試験場が完成。6年10月、全国初の第一回陶磁器見本市が開催されましたが、次第に世情は不安定となり、物資が不足する中、金属代用品として有田焼による製品の開発が進められました。同16年、遂に太平洋戦争勃発。大人から子供まで苦しい生活を強いられた時代でした。戦後、復旧が進む中、23年に大水害が発生。町の多くが水没し死者24人という大きな被害を被むりました。

その後30、40年代と日本全体が高度成長期を迎え、有田も有田町・東有田町・曲川村の一部が合併し、九州陶磁文化館や県立窯業大学校など各施設の建設や業界の組織化も進みました。

●平成の時代とこれから

平成３年ごろにはそれまで好景気だったバブルがはじけ、有田にも深刻な不況が訪れました。しかし、有田４００年の歴史を振り返ってみた時、何度もこのような経験を繰り返し、そのつど切り抜けてきたことがわかります。きっとこの不況も人々の知恵で乗り越えていけるのではと思います。ただ21世紀が新たな戦争で幕開けとなってしまったことに幾ばくかの不安がありますが、次世代を引き継ぐ子供たちにとって住み良い日本であり、有田であってほしいと思います。

平成13年度
企画展

『20世紀の残像
～そこにあなたの姿がありますか』展

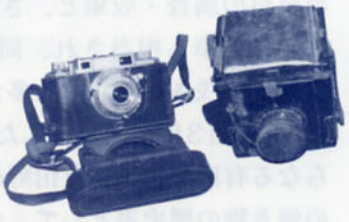
有田町歴史民俗資料館では平成10年に『なつかしの有田～1、000点の写真が語る有田の近・現代史』展を開催しました。その折には多くの町民の方々に観覧いただきました。今回はその後に収集した写真をもとに、20世紀の有田の歩みを振り返ってみたいと思います。何気ない一枚の写真がその時代を如実に物語っていることがあったり、おじいさんやそのまたおじいさんという先祖が写っていたりと、多くの歴史を語ってくれます。前回の企画展ではまだ写真に写るということが一般的でない時代で、撮影されたとしても何かの記念の場合が多かったようです。時代は移りカメラが各家庭に普及し、あらゆるシャッターチャンスに有田の歴史が収められてきました。

これらの写真からあなたが生きた時代、あなたの姿を見つけてください。

期　間　平成13年11月23日(金)～12月24日(日)
開館時間　9時～16時30分
場　所　有田町泉山　有田町歴史民俗資料館
入館料　無料

昭和3年から7年にかけて国道33号線（当時）の拡幅工事が行われた。幅員2間（3.64メートル）を5間（9.5メートル）に広げる工事が行われたが、そのころの有田銀行（現在の佐賀銀行有田支店）前の工事の様子。〈大樽・手塚信雄さん提供〉

古木場にあった金山の出荷風景。左中程の建物が事務所。後方は古木場から戸矢にかけての風景。大正から昭和にかけてと思われる。〈古木場・黒川国広さん提供〉



20世紀の有田小史

明治34年、1901年の1月1日、東京慶應義塾大学の新講堂で、午前零時から「19世紀・20世紀送迎会」が開催されました。出席者は鎌田栄吉塾長以下500人。講堂の四方には、ナポレオン・黒船・日清戦争・ドレフュス事件（19世紀末フランスに起こった売国疑獄事件）などとともに、19世紀の象徴としての老人、20世紀を象徴する子供たちの姿が描かれていました。

大学創設者の福澤諭吉はそのときすでに病床にあり、翌2月3日に死去しました。来る20世紀を諭吉はどのような時代だと予感していたのでしょうか。

その時から100年が過ぎました。この1世紀を振り返ってみたとき、皆さんはどのような感想をお持ちでしょうか。年配の方は戦争に明け暮れた日々を思い出されるでしょうし、戦後生まれの方は苦しい生活ではなく、高度成長期の中で目まぐるしく変化していく生活を覚えておられる事と思います。人それぞれ、20世紀の思い出は異なるかと思いますが、今回は有田の20世紀を残された資料や映像をもとに振り返って見ました。

●明治のころ

この頃日本全国で「20世紀」という言葉が流行りました。明治34年（1901）2月には東京で戦死者及び準戦死者の遺族救済を目的とした愛国婦人会が結成され、8月には奥村五百子会長が来有し桂雲寺で講演を行いました。翌35年の陶磁器品評会に初めて天草陶石の使用が認められました。それまでも天草陶石を使用したものが出品されていましたが、品評会ではその使用を認めず拒絶していました。その年の出品作には天草陶石を使用したものが多く、「有田の門戸開放」と賞されました。

ようこそ、職場体験・総合学習

恒例となった有田中学校２年生による職場体験に、今年は３人の女子生徒がやってきました。10月４日、学芸員になりたいという目的をもった中島千陽さん、松本ひとみさん、近藤明子さんは元気一杯に出勤。まず館内の見学と学芸員の仕事について説明を受けました。仕事の内容やどうすれば学芸員になれるかという質問があって、将来が楽しみです。

その後、出土文化財管理センターで発掘した陶片の整理作業を体験。割れ口に面相筆で細かく遺跡名や出土地点を書く頃は、皆な真剣な面持ちでした。細かな作業に腕が凝ったと言いながらも、将来の夢をしっかりと見据えた表情でした。

また、10月９日には有田中学校１年生が総合学習の一環で、それぞれの調べ学習に来館。グループによって調べる内容が異なり、館長はじめ館員総出で対応に追われましたが、有田の歴史や風物についてもっと知ってもらって、ふるさと有田のことを好きになってもらえたらいいなと思いました。

訃　報

元当館館長で、有田町史編纂室長でもあった宮田幸太郎先生が去る９月18日、滋賀県大津市において亡くなられました。宮田先生は大正４年有田に生まれ、旧制武雄中学校、佐賀高等学校をへて京都帝国大学法学部を卒業。一時期有田町高等青年実業学校で教鞭をとり、のち長崎県立佐世保南高等学校教諭を勤められました。昭和53年から有田町史編纂事業に携わり、膨大な資料の調査・収集と、さらに陶業編に関してはⅠ、Ⅱ共に執筆も担当され、同62年の事業完結までに宮田先生が残された功績は多大なものがあります。

発刊後13年が過ぎましたが、全10巻・別編１巻からなる有田町史は、有田町の歴史にとどまらず、日本の焼き物の歴史書として、今なお日本国内はもとより海外からの注文があります。

国の重要無形文化財保持者で、長年有田町文化財保護審議委員会委員を務められた今泉今右衛門先生が10月13日に赤絵町の自宅で亡くなられました。先生は東京美術学校（現東京芸術大学）を卒業後、家業の色鍋島の伝統技術継承に尽力されました。昭和50年13代今泉今右衛門を襲名。翌年「色鍋島今右衛門技術保存会」を組織して国の重要無形文化財の総合指定を受けられ、さらに平成元年に国の重要無形文化財色絵技術保持者（人間国宝）に認定されました。昭和40年代に始まった町内の窯跡発掘調査にはたびたび足を運んで指導いただき、また当館の資料整備のために多くの書籍や、赤絵窯移築の際は覆屋建築の費用をご寄付いただきました。

お二方の生前のご尽力に感謝し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

ワンページラジャ

いまこそ……大きな力に

有田には業界を結集した色々の組織があります。商工会議所は昭和２年「商工業の改善発展を図ること」を目的に法律で定められ発足しました。

戦後、中小企業等協組法や事業協組法が制定されました。有田でも高度成長時代、不況時代に発足し、なかには事業内容が変わったもの、休眠中のものもあります。

いま有田は大不況の中にあり、事業所によっては負担金を軽くしたいところもあると思います。全国的組織である経団連・日経連が合流しようとしている時代です。有田においても、今こそ結集して「大きな力」となり、先人の歩みを振り返り自信と誇りに満ちた窯業地再構築の時に来ていると思います。（久富桃太郎）

季刊『皿山』

通巻52号（平成13年12月１日）
編集・発行　有田町歴史民俗資料館
〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678　FAX0955-43-4185